

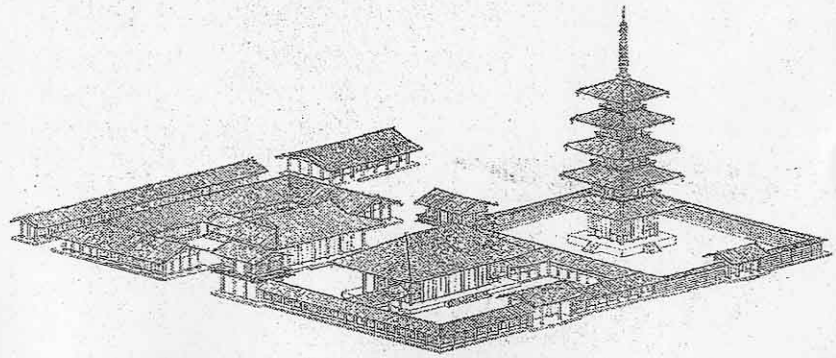
今回は、古代の近江において国家が主導した信仰・宗教の中心である国分寺について。近江国分寺は天台宗の開祖「最澄」が得度した寺院としても知られますが、その実態はいまだ謎にまつまれています。近江国分寺は、焼失などで幾度か場所を移しており、近江国庁に近い琵琶湖を望む瀬田廃寺（大津市瀬田）や、瀬田川を挟んだ国分遺跡（大津市石山）の一角にあったとするなど、所在地や時期にさまざまな説があり、長い間論争が繰り広げられていました。しかし、創建時の国分寺としては「甲賀寺」が最も有力視されています。

奈良時代の中ごろ、聖武天皇は疲弊・混乱した国を仏教の力で立て直そうとしました。天平13年（741）には社会不安を取り除き、精神的なよりどころとするために、各国に1つずつ国分寺と国分尼寺を建立するよう命じ、翌14年（742）には紫香楽宮造営、15年（743）には大仏造立の詔を出して「甲賀

寺」において大仏（丈六仏の盧舎那仏）の造営にとりかかりました。しかし、火事や反対派の不穏な動きが度重なため、遷都後わずか5カ月で都は紫香楽宮から平城宮に移り、当地での大仏造立は中止され、東大寺で完成されることとなったのです。けれど、東大寺で使用される木材などは、近江から琵琶湖・瀬田川の水運を利用して大和へもたらされました。それを取り仕切ったのが石山寺といわれています。

この紫香楽宮の場所ですが、甲賀市信楽町黄瀬・牧の丘陵上には「内裏野」「寺野」の地名が残り、すでに江戸時代には古瓦や礎石が地表面に露出していたことから紫香楽宮と推定され、大正15年（1926）に国史跡に指定されました（「史跡紫香楽宮」）。ところが、昭和5年（1930）に行われた発掘調査では、東大寺に似た建物配置（伽藍配置）が明らかとなり、宮との関係が混迷を極めました。しかし、近年、北

甲賀寺



甲賀寺の復元図（奈良文化財研究所原図）



甲賀寺金堂跡。礎石の間に「紫香楽宮」のほこらが建つ

方約2^{キタ}に宮構造を示す「宮町遺跡」が発見されたことなどから、すでに指定された「史跡紫香楽宮跡」を「甲賀寺跡」とする方がより妥当であると判断されるようになりました。

甲賀寺跡は、宮町遺跡を紫

香楽宮に当てはめると、南方の小高い丘の上に建立されたこととなります。丘陵上には、中門・金堂・講堂を直線に並べ、金堂の東には塔を、講堂の両脇には経蔵と鐘樓を、背後には大規模な僧坊を持ち、いずれも大がかりな礎石建とされていることから、国の威信をかけた寺院であったことがわかります。そしてその規模や構造から、創建時の近江国分寺と考えられているのです。

（滋賀県文化財保護協会 中川治美）

初代「国分寺」幻の大仏計画も